

# 田園生活を愛し 三里塚に生きた文人

両国の牛肉店、いろは」に育った荘太

大正12年9月1日、木村荘太は関東大震災に遭遇し、都会を去る思いがつのり、かつて宮崎県の日向の「新しき村」にいた宮田重三郎に「三里塚に君も来ないか」と誘われ、同年12月、遠山村久米野(成田市)に移住した。荘太34歳のときである。

当時、木村荘太は、文壇で「応名」とあり、文学史にもその名を残す存在であった。

荘太は明治22年2月3日、東京両国吉川町に牛肉店「いろは」経営者木村荘平の子として生まれた。

同29年、浅草橋近くの千代田小学校に入学。まもなく同級生の悪口から「愛人の子」という自分の出生を知った。

父の荘平は、東京名物ともいえる牛



木村荘太(きむら そうた)

東京両国吉川町(現在の中央区)に生まれる。小説家・評論家。大正12年34歳のとき遠山村久米野に移り住む。

成田での著書に『晴耕雨読集』、『農に生きる』、『林園賦』、『魔の宴』などがある。

肉店(牛飯店)を市内に20軒ほど経営していた。さらに荒川区には葬儀社ももっていた。投機師、巨商ともいわれたが、「彼がこの世に遺した妻は十数人、生前に認知した妻子は女十七人、男十三人、かつきり計三十名だった」と北条三郎著『いろはの人々』(文化出版社発行)に書かれている。

このことは荘太自身が最後の作品ともいふべき『魔の宴 前五十年文学生活の回想』の中で「それだけでも私に堪えられない気をさせるものだった。」と書いている。

しかし、この兄弟の中で、荘七は俳優に、荘十は作家に、荘十二は映画監督として活躍し著名な人材として名をなしている。

## 10代から文学を志し 多くの文人と交流する

荘太は明治30年3月、東京京華中学校を卒業後、進学を許されず牛肉店の家業に従事したが、自学自修し築地でサマー女史に英語を学んだ。同40年ころからは翻訳の業に専念し、大正年間



文学生活のすべてをつづった自伝小説『魔の宴』

には、ストリンドベリ、メーテルリンク、ロマン・ロラン等の文学書を英訳、シエイクスピア、「トロイラスクレンダ」などを英語より翻訳している。

一方、荘太の文学への志向は強く、明治40年10月、硯友社主催の紅葉祭に参加。まもなく生田葵山の文学会に参加。文人達との交わりを深めていった。

同41年、荘太の処女作が「新思潮」に掲載された。これを契機に小山内薫に知己を得、さらに鳥崎藤村に誘われて「龍士会」に出席。

この間、同42年、兄嫁の妹・満喜と結婚する。

同43年、荘太は、後藤末雄、和辻哲郎、谷崎潤一郎らと第二次「新思潮」を刊行し、第一号に評論「チエーホフの脚本」を書いた。

同45年、妻満喜と離婚し家を出て、しばらく鳥崎藤村庇護の下で暮らす。

大正2年、伊藤野枝を知り、彼女と大変な文通を重ねる恋愛となり、その

経緯を小説『索引』として発表。荘太はその後、異母妹清子と同居。

同7年、秋田県平澤町出身の婚約者斉藤モトとともに、人間の真・善・美を求めようという武者小路実篤の「新しき村」(宮崎県日向村)「じくりに共鳴し、その中心となって参画した。

しかし、現実には、村の運営をめぐって対立し、村を離れて帰京する。

同8年12月2日、長男(長男)4年後長女彩(通称・彩子)が誕生。

同10年、後の同盟通信社(社長岩永裕吉)に入り、米国向け日本文化事情紹介の資料を編集、その傍ら米国新聞雑誌記事の翻訳に当たり月刊『世界の批判』編集も行っている。同11年、動物愛護日本人道会(ジャパン・ヒュー



久米野に移り住んだ木村荘太と家族(昭和8年)

メン・ソサエティ)主事に就任している。

## 遠山に移り住み 田園生活を始める

大正12年、荘太の一家が遠山村に移り住んだ。ここでの生活は、文筆での稼ぎと東京の書店や出版社、友人に掛け合って借金をしたりの生活で苦難の日々が続いた。

しかし、そうした10年間の生活をまとめた『農に生きる』の著書には、田園生活を楽しみ、愛する思いも強まっている。同著の「田園雑稿」では、

貧乏村の先生とならんか日本中のはげ山に樹を植ゑんかと存候

という子規の歌に心境を託したり、またトルストイの生誕100年の記念としてトルストイに心酔する農家の青年たちと養鶏組合を結成している。

また、「生活の断片」の章の中では、子等みたり生ふる家居のあるじわれ四路となりてつべも惑はず

と歌っている。これは誕生日を迎えた荘太が、農業者としての生活を何ものにもかえがたいとしている気持ちを吐露した歌である。しかし、荘太は、令男と彩の2人の子を遠山村の小学校に入れず自分の家で教育した。

昭和4年、2女の香子が満4歳の誕

生日を待たず疫病で急逝した。

同8年、都新聞の文芸部長上塚香信の好意で荘太の『田園随想』を久木今作のペンネームで投稿し好評を得、これが単行本『農に生きる』『晴耕雨読集』として出版された。やがて近在の村人たちも、荘太の家を訪れるようになった。

## 成田の文学愛好者と 「新晴」を発行

昭和12年、荘太は『成田山史』の編集の手伝いをする。同14年には成田中学校の事務嘱託となり同時に英語、園芸などの先生も兼ねた。荘太の教師ぶりには飄々として、生徒がいたすらをしても全く気にしない大人のような先生であったという。頭のテツペンが薄くなって禿げていた風貌から「おっべし芋先生」というニックネームをつけられた。

同15年9月、荘太の才能を見込んだ今沢慈海の世話で、荘太は成田図書館(現在の成田山仏教図書館)に勤務する。

ここでは、未整理であった2万冊ほどの漢籍と洋書の整理の仕事があった。特に、石川昭勳大僧正等が、外遊の都度買い集めた洋書がヤマをなしていた。荘太は、司書の綿貫実と組んで、荘

太が語学力を発揮して洋書を読んで仕分けをし、綿貫が目録、カードの作成に当たった。

こうして同21年6月まで図書館勤務をしたが、この間に、エリオット・E・ミルズの「英国衰亡史」を翻訳刊行し、「レオナルド・ダ・ヴィンチとの邂逅」を執筆、文芸評論家としての面目を発揮している。

一方、成田の若い人たちとの接触が深まっていく中で、「読書会」に参加したり、町内の文学愛好者たちと荘太が「発行に際して」の一文を書いた荘太命名の雑誌「新晴」が発刊(昭和21年2月)された。同人には、長谷川行勇、小野幸、平山まさ、石渡松江、宮田戊子、後藤図子、加藤正敏、伊藤美代など20数名が加わった。

こうして荘太は、成田町や遠山村の人々との交わりを深め地域の文化、文芸の向上に貢献してきた。

その後、生涯の大作とも言つべき『魔の宴』を書き上げた荘太であったが、同25年4月15日、成田山公園で自殺、その出版の日を待たず最後となった。

荘太の墓は、友人であった安達晴美(元三里塚郵便局長)の手で作られた墓標だけが清水の墓地に立ち、目印の椿だけが大きく育っている。

(文中敬称略)